



Title	文献史からみた古代北方世界の『民族』的動態
Author(s)	田中, 聡
Relation	新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Citation	新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書, 62-85
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56282
Type	report
File Information	t2ch2.pdf



第2章

文献史からみた古代北方世界の『民族』的動態

田中 聡

立命館大学の田中です。実はこういうテーマの研究をしておきながら、北海道で報告をする機会が今までなかったんですけども、いろいろ勉強させていただきたいと思います。レジュメ・資料はA3版で七枚あり、右肩に丸番号が振ってあります。適宜ご覧頂きます。

今回、私に与えられたのは「文献史から見た古代北方世界の『民族』的動態」というテーマでした。この問題を考えるときに検討を要する概念的な問題があります。

日本古代の蝦夷とか隼人とか、あるいは南島人といわれるようないわゆる異民族的な文化を持っていたと思われている、日本とその周辺地域の辺境に住んでいる人々、この人々のことを古代では夷狄という形で一括して呼んだ時期があるんですね。8世紀前半までにそういう枠組みが出来、それがまただんだん変わっていくというのが古代の在り方ですけども、これを「民族」と呼んでいいのかどうかという問題がまずあります。この点は後で養島さんのコメントの方でも問題になるようですが、日本古代夷狄の研究史というものについて考えたときに、これまで3つぐらい大きな研究の潮流があったと考えられます。

1つは異民族論、蝦夷を含む夷狄と呼ばれる人々を異民族としての実体を持つものにとらえるという理解。それから2つ目は辺境の人々、日本人ですが辺境地域に住んでいる人々を国家の側の都合で夷狄と呼んだという考え方。3つ目はもっと新しい潮流で考古学の成果なども踏まえた北方史とか南方史といわれるような新しい実体論といいますか、そういう議論があると思います。

資料の1番をご覧ください。細かい説明は省きますけれども、近代以降、日本での夷狄と呼ばれる人々の研究史をずっと整理しますと、1880年代から戦後の1950年代ころまでは、異民族論という枠組みで考える人が大半だった時期が続いています。これは日本が国民国家を形成する段階において、日本人という枠組みをつくっていくときに、日本人の周辺に住み、異質な文化を持っている先住民族や、それから日本人種ではないけれども非常に近い関係にあった人種であるとかというとらえ方で、夷狄と呼ばれる人々を理解するという考え方でした。

この考え方というのは30年代になって、マルクス主義が日本に本格的に導入されてくると、世界史の発展法則といった考え方とも対応して、民族の形成史という枠組みの中でとらえられていくようになります。明治時代の後半以来、戦後すぐぐらいの時期まで民族という枠組みで蝦夷をとらえる。実体として民族的な独自性を持つ集団としてとらえるという考え方がずっと存在していたということになります。

ところが1950年代の後半ぐらいから見直しが進められていくことになります。その中で最も重要な役割を果たしたのは、先ほど武廣亮平さんの報告で何度も言及された石母田正さんの枠組みだったと思います。石母田さんは、蝦夷が異民族かどうかということは別にして、その蝦

夷と呼ばれる人々を古代国家が成り立つための古代国家の構造を成り立たせる、とても重要な要素として国家が把握したのだ。そのことに注目することが重要だという論点を展開したんです。

つまり民族の実体という問題が主要な問題なのではなくて、古代国家を考える上で夷狄とか蝦夷とかと呼ばれるような人々が、どういう政治的位置にあるかということを考える方が重要だという指摘をされました。それが王民・良民共同体論、あるいは東夷の小帝国論といわれるような議論になるわけです。

これは要するに古代国家が自己の支配する臣下、人民を支配民族、つまり王民というものとして組織し、王化が及ばぬ民として夷狄と諸蕃とを設定するという考え方です。先ほどの武廣さんの最初のレジュメのところで図示されていたものですね。王民とこれら化外の民と一括される人々を対立させるということで、この古代国家の構造は成り立っているということです。

それが今度は東アジアの他の国家、中国や朝鮮の国々などとの関係の中で、倭国、日本国が位置付けられていくときに、「東夷の小帝国」という形で外国との関係が成り立っていく、そういう位置付けになってくる。それが、蝦夷という集団は国家が異民族的な存在として設定したものだという考え方につながってくるわけです。

この点を非常に強調していくのが石上英一さんです。石上さんの議論は、帝國的構造論という形で現在も非常に大きな影響を及ぼしています。非常に単純な表現でエッセンスをとらえると、蝦夷は夷狄の主要部分を構成する疑似民族として創出されたという考え方です。つまりそれは本来の民族とはちょっと異質なものとして古代国家がつくった民族。民族と見なした人々だという理解になります。

夷狄世界というのは、こういった蝦夷とか、それからおそらく沖縄周辺の人々ですね。南島人と呼ばれるような人々を夷狄と呼ぶことによって成立するわけですが、その世界は8世紀を通じての古代国家の軍事的侵攻と、それから行政的な支配によって9世紀の末には内国化して消滅するという。つまり夷狄という枠組みそのものが9世紀の末にはなくなってしまうという考え方になります。以後、帝国の構造というのは観念的な次元で、つまり貴族の頭の中で、そういったものがあり続けるという観念として維持されていくというとらえ方をします。だから国家がつくり出した実体が200年ぐらいたって消えてしまうという、そういう理解の仕方になっています。

しかし、この理解は、やっぱりかなり問題を含んでいるのではないかと私は思うんですね。それは蝦夷の問題を日本列島内の秩序の次元にまず解消してしまっているという点がまず疑問であるということですね。なぜその蝦夷と呼ばれる人々は、自分たちが夷狄であるということを受け入れたのでしょうか、あるいはそこに何か葛藤が生じたのか。

先ほど武廣さんの報告の最後の部分は、その点をまさに取り上げられていましたけれども、彼らはいったいどういうふうに分のことを考えていたのだろうか、蝦夷社会内部に存在する差異というものも、そこでは非常に等閑視されていると私には感じられました。つまり視点が常に古代国家の側にのみあるということです。

むろん我々は国家や大和王権が残した文献史料を基にして、このテーマを研究せざるを得ないわけで、そうすると当然支配者側のその思想といいますか、その観点というものが、その史

料の中にはっきり表れているわけですが、だから蝦夷の人々が自分のことをどう考えたかとかということは問えないのかという問題を逆に立てないと、いつまでたっても古代国家の枠組みだけが繰り返し確認されるだけの研究になってしまうのではないかという疑問といたしますか、違和感を私はずっと持っているわけです。

それは夷狄とされた地域社会、集団側の主体性といった問題をどう評価すべきかという点につながっていきます。この問題を考えるとき、古代の東北アジアの全体の歴史を見ていますと、2つぐらい大きな画期があるような気がするわけです。1つは7世紀の後半から8世紀の20年代ころまで。もう1つは9世紀の第4四半期ぐらいから10世紀の20年代ころまでの時期で、それは要するに朝鮮半島で新羅が統一国家を造り、それから渤海ができて、その渤海も新羅も滅んでいく時期です。その周辺の地域も、それこそ唐の国ができて崩壊していくという時期とも少しずれていますが、重なっている部分もありますし、北方世界が大きく変動するというのも、そういったところに全部連動しているわけです。この時期において、日本列島とその周辺の蝦夷だとか、それから靺鞨と呼ばれる人々の一部が北海道と周辺地域に展開した民族社会の構成がどう変動したかということを考える中で、最初に述べたような自他認識にどういう影響が及んでいたか、文献史学の側から見通しを述べたいと思います。以下、それぞれの時期に即して最初の時期と、それから2番目の時期と、それからそれ以後という3つの時期に分けてポイントとなることを順にお話しするという形を取っていきます。

まずレジュメの1ですけども、「蝦夷の出現と北方支配体制」というタイトルを付けました。律令国家が、その蝦夷という人々をとらえるときに2つの表記が代表的なものになります。1つは「毛の人」と書くモウジンで、もう1つは「蝦夷」と書くカイですね。両方とも和語ではエミシと読むわけですが、使っている用字が違っているわけです。これは要するに中国にもともとあった毛人という言葉が日本が取り入れるときに、もともと日本にあったエミシというその集団とか観念と、その漢字を結び付けて、この表記の形になるわけですね。

この毛人という言葉は初期はたくさん使われていたようですが、8世紀に入ると人の名前などに残っていく形を除くと、古代国家が制度的に使うということは、ほとんどなくなっていきます。この毛人という概念からカイという言葉を使う概念に変わっていくというのが、律令国家の形成期ということになるわけですね。7世紀後半から8世紀の20年代というのは、まさに律令国家体制というものが、日本列島とその周辺地域において一定の完成を見る時期だと考えられます。その時期について、2002年に発表した「夷人論」というタイトルの論文で少し考えたことがあります。史料編の1番の①をご覧ください。先ほど武廣さんの資料の中にも引かれていたと思いますが、日本の律令の注釈を行っている『令集解』という書物がありますが、その賦役令辺遠国条に関して注釈が書かれています。大宝令の内容を踏まえた最も古い注釈を後にまとめたものが『古記』です。大宝令は701年に成立していますから、7世紀末から8世紀初めころの法令について、どう理解されていたかということが書かれているということで、その意味で古い時期のその観念というものを理解する上ですごく有益だと考えられているんですね。

史料編の1番①の二つめの傍線部を見ていただきますと、辺遠国条で「夷人雑類」と呼ばれる人々が住んでいる地域では、「調」という税を出す場合には、状況に応じて、それを押し量って行うようにとある。ほかの地域に住んでいる王民、公民と呼ばれる人々が出す調と必ずしも

同じように払わせる必要はないということが書かれているんですが、その中で「夷人雑類」という語句に注釈が付けられているわけです。

『古記』というのは8世紀初め、7世紀末のおそらく実体のある程度反映したものだと考えられるんですけども、そこに見られる夷人雑類というのは、「毛人、肥人、阿麻弥の人」。つまりエミシ、ヒノヒトあるいはクマビト、そしてアマミの人等の類を指すと書いてあります。その後を少し見ていくと「隼人」も入ってくるんですが、私はこういった人々のすべてに人という言葉が共通しているところが重要だと思ったんですね。東北地方のエミシ、それから肥前、肥後とか呼ぶときの肥の球磨の地域のことだと思うんですけども、その人。それから阿麻弥というのは奄美大島の住人のことなんですけども、その阿麻弥の人。つまり律令国家という国家体制が出来上がっていく直前の時期まで、その何とかの人、〇〇の人という言い方で、周辺地域に住んでいる文化的にちょっと異質な要素を持った人々が、そういう言い方で呼び分けられていた時代があったのではないかと理解したわけです。そのことを「夷人的関係」という、熟さない言葉ですけども、そういう表現で呼ぼうと考える。そういうことを前に書いた論文の中で主張しました。

従来そういったものは大和王権との間に個別的な交通関係、夷人的関係と呼べるものを取り結ぶという形で、これまでずっとやってきていた。特にここでの毛人は東北南部の住民ということになりますが、この人々の中の有力者。この中でも例えば有力者はオオエミシということで、大毛人と書いてオオエミシと読ませるといって、そういう特殊な表記が『日本書紀』の中に出てくるんですね（史料編2）。その「毛人」という言葉自体は、中国の古典的な古い地理書『山海経』等の中にも出てきますが、それに大きいという字を付けて大小という分け方をするという発想は中国にはありません。

つまりそれが日本に入ってきたときに以前からあるエミシという呼称と対応して、その集団の中でも大いなる者、有力者ということで、オオエミシという表記が作られたと考えると、これはやはり和語化したことがはっきりそこに表れていると考えられるわけですね。こういう形で大和王権と、そういったそれぞれの別々の集団の間に何とか人と呼ばれる有力者が、辺境地域にたくさん現れてきていたというのが、7世紀前半頃までの実体ではなかったかと考えるわけです。

こういうものが「夷人雑類」という言葉で一括されていくことが、7世紀末に起こってきて、これをベースにして、今度はこれを律令国家形成期に地域ごとに再編成するということをやっていく中で、公民ではない夷狄身分というものが生まれたと考える。そういう段階の違いというものを踏んでいるのだという理解ができるのではないかとということです。

ちなみにこの夷人と呼ばれるような人々ですね。要するに例えば大毛人、オオエミシと呼ばれるような人々に対しては、おそらく差別的な見方というものはまだなかったと思われます。7世紀の前半期までは。ところが律令国家の形成期に、それを固定するようなことをやっていくわけです。史料編の3番の②になりますけれども、658年に派遣された遣唐使は普段連れていかない人々、蝦夷の男女2人を連れて行きます。陸奥の蝦夷、熟蝦夷という別の呼び方をしていますけれども、この2人を連れていって唐の天子に見せたという記事が、この遣唐使に随行した伊吉連博徳という渡来系の人の記録の中に残っているんですね。それをわざわざ『日本書紀』

は特記しています。

このときの遣唐使がどういうことを主張したのか。要するにこの人々というのは都から見ると東北の遠方に住んでいて、毎年必ず朝貢してくるものであるという。どんな生活をしているのかということについて、非常にゆがめた表現を取る。これも結構知られた史料なのかもしれませんが、その国には五穀がなくて肉を食べて暮らしている。建物も家もない。山の中に住んでいると言うんですね。唐の天子はそういった話を聞いて、こう言ったというのが傍線部の2つ目のところにあります。私は蝦夷の顔や姿というものが大変ほかの人と異なっていることを見て大変面白かったと言っているというんですね。こういった記事をわざわざ『日本書紀』は随行者の記録として載せているわけです。これはもう明らかにその蝦夷という言葉、その観念に、ある意図を持った歪曲が与えられたすごく早い例だろうと思います。

ちなみにそのときに中国の側でも、初めてカイの国、蝦夷の国という言葉が固定的に導入されたのではないかと思われるところがある。史料編の3の④、『新唐書』の東夷伝日本国条の中に使われているエミシという言葉は、いわゆるカイと書く普通の蝦夷ではなくて、「夷」の字が虫偏になっているんですね。この語というのは、この史料以降からしか出てこないわけです。つまりそれはやっぱりこの時期の日本、律令国家側の主張によって、そういった言葉がおそらく逆に唐へともたらされたのだと考えると、こうした観念を意図的に作り出したということが読み取れるだろうと思います。

さて、そういうことが起こった後で、蝦夷と呼ばれる人々は、7世紀末から8世紀前半の時期において、どういうふうにそれぞれの住んでいる地域において、その観念を受け入れていくのかということについて次に考えます。史料編の4番・5番のところをご覧ください。先ほどの武蔵さんのご説明の中で、蝦夷を支配するときに城柵を設けるという記事の話が出てきた点とちょっと重なっている部分があります。『日本書紀』の終わりのあたりと、それから『続日本紀』の最初のあたりに、蝦夷、カイと呼ばれるような人々が出てくるだけではなく、他の特徴的な用語が出てくるんですね。それは肅慎（シュクシン／アシハセ）、それから蝦狄（カテキ）という言葉です。

史料編の5番①の傍線部に「肅慎の人あり」とありますし、それから③の傍線には「肅慎の志良守叡草」という言葉が出てきます。ここでは人という字が取られているというところが重要かもしれません。とにかく肅慎の人とか肅慎という言葉が出てきますし、それから『続日本紀』の本当に最初のあたりのところにだけ蝦狄という言葉が出てくる。蝦狄のテキは夷狄の「狄」、つまり四夷のうち北方の異民族を指す狄という言葉があるわけです。それが史料編の4番、5番のところに使われている。これがいったい実体として何を指すものなのかということが問題になります。7世紀の後半、律令国家が北方の日本海側で北方経営を行っていくときに、その指揮官として「阿倍比羅夫」とか「阿倍引田臣」が出てくるんですが、この阿倍氏の要請があって、北海道の西部や、それから津軽とか日本海の北部の交易拠点、能代などに、この蝦狄の族長たちによって蝦夷郡と呼ばれる施設が設けられた時期があると思われるんですね。族長を郡領に任命して、郡の政所を建てさせ、肅慎と呼ばれる人々との交渉を安定化させるということをやります。

そして蝦夷の戸口数の掌握まで計画されていたと考えられるんですが、実際に人の数が確認されるということがその後あったのかということとは分かりません。7世紀の後半にそれが計画さ

れて、一部でちょっと行われた可能性はあると思いますけれども、それがその後定着していくということはどうもなかったようです。当時この日本海北部において、国家が積極的に介入していくような状況が見られることが重要です。

ただ、その場合、あくまでもそれは日本海の沿岸地域に住んでいる蝦狄と呼ばれるような人々があつての支配です。彼らがいなければ、そういった支配というものはおそらくできないという状況にあったと考えられます。このような日本海側の城柵においては肅慎対蝦狄とか、それから蝦狄対蝦夷といった戦闘がどうも行われたということが考えられるわけです。その緊張関係というのは、7世紀末から8世紀の初めにまで及んでいたということはだいたい想定がつきます。史料編の5番⑤に、和銅5年の史料が載っています。712年のことですね。「国を建てて疆を辟くということは、武功が貴ぶる所」だということが最初にあつて、傍線部に入りますが、「其の北道の蝦狄、遠く阻險を憑みて、実に狂心を縦にし、屢ば辺境を驚かす」とあります。つまり北道の蝦狄が辺境を脅かすような存在となっているのだということが出てくるわけですね。この地域を安定させるために出羽国という国を建てなければならないということが主張されている。

そういう緊張関係がこの地域にあったことを考えると、蝦狄と呼ばれる人々が、ほかの蝦夷などとの間でなぜ対立関係にあったのか、理由を考える必要があります。

単に律令国家対蝦夷という形で考えると、この緊張感というのは説明ができないと思うんですね。この地域の反対勢力に対して国家が大軍を派遣して制圧するという8世紀後半のような形の支配は、この時期はまだやっていないわけです。ということは、やっぱりこの地域そのものの中でといいますか、この地域の問題として、この緊張というのが何によって起こっているのかを考える視点が必要になると思うんです。

それは何かということを手後で考えますけれども、それを治めるために律令国家が設けた管轄のシステムとして、「北方支配体制」というものを想定してみました。先ほどから言っているように、この地域にもともと力を持っている蝦狄の集団とか、あるいは蝦夷の集団などを用いて、その人々を媒介にして、この地域に蝦夷郡といわれるようなものとか、それから城柵などを設けることをやる。それによって、この地域全体を間接的に支配するシステムです。おそらくその体制というのは、北方からいろいろ入ってくる文物というものを安定的に供給することのために必要とされたんだと思いますけれども、それは690年代に完成して、ずっと南にあった出羽柵が秋田まで移転するのが733年になるんですけども、その時期ぐらいまでずっと機能していたと思います。

古代国家は、蝦狄と対立関係、緊張関係が続いていくということに対応しなければいけないので、征討を行ったり、それと対立する関係の者を使ってこの支配体制を維持しようとしています。また、その背後に位置する「肅慎」、北海道にあったと思われる「靺鞨国」に直接、渡島津軽津司という役人を派遣して対応するんですけども、ほとんどそれは一過性のものに終わってしまって、なかなかそれが安定しない状況であったということが、まず1つ確認できます。

では、ここで言っている「肅慎」というのは、いったい何者なのかということを考えてみます。レジュメの2pに「靺鞨諸部の変動」と書いてあります。なぜここで中国大陸北方の異民族集団である「靺鞨」が出てくるかということなんですが、資料の図1があります。ここに隋代と

唐代の北方世界について、若月義小さんが作られた地図が載っています。主に中国の史料などに出てくるこの地域の民族的集団といわれるものの分布を表現したものがこの図ということになります。

これとレジュメ2pの上にある概念図を対応させて見ていただくと、ちょうど位置関係が分かると思うんですね。若月さんは、それまでの研究、東洋史の方でこの地域のいろいろな民族問題について考えられてきた和田清さんとか、池内宏さんとか、日野開三郎さんといった方々の古い研究を再評価されて、この時代に民族的な集団の分布が大きく変動していることを考える必要があると言われました。『隋書』列伝の中に「靺鞨伝」があり、『旧唐書』の中にも同じく「靺鞨伝」がある。さらに『新唐書』の中には「黒水靺鞨伝」があって、ほかにもこの中国の東北地方の住民について、隋や唐の国との交渉があった集団について書かれている史料がある。この3つに共通して、例えば黒水部（黒水靺鞨）といわれる集団とか白山靺鞨とか、そういったものがあるが、これらを比較したところ、途中で消えてしまう集団も結構あるということに気付くわけです。特に『隋書』「靺鞨伝」から『旧唐書』「靺鞨伝」の間に大きな変動があるということが分かる。隋が滅び唐が建国し、それで唐と中国東北地方との間の関係が非常に敵対的な状況が続く中から、特にアムール川の流域、中流域のあたりを主に支配していた黒水部、要するに黒水靺鞨と呼ばれる集団が、ある程度安定した支配をこの北部の方でできるようになる。唐との関係も非常に密接化するという時期に変わってくるのが8世紀前半の時期です。

その時期には、もっと南方においては渤海という国ができます。『隋書』の「靺鞨伝」に出てきた粟末（ゾクマツ）部、粟末靺鞨といわれる集団を主要勢力として建国された国ということになるんですね。だからこれらの史料を比較することによって、この地域において靺鞨と呼ばれる非常に多様な人々の含まれている集団が、どんなふうに移動したり変化しているのかということを考えることができるというのが、その主張の重要な点なわけです。

ここで特にこの北海道の問題と関係してくる部分というのは、どこになるかというと、『隋書』の号室部の集団と、それから『唐書』の中に出てくる窟説（クッセツ）、それから莫説（バクセツ）部、あるいは莫曳皆（バクエイカイ）部といわれるような集団が出てくるんです。この地図の上にそれぞれを落としていくと、地域的にはどうもサハリンから北海道の北部のあたりまで一帯のところに、こういった集団が位置付けられる時代があったんじゃないかと考えています。

靺鞨の諸部はもともと7つぐらいに分かれ、それぞれが大河の水域を支配するかなり大きな勢力で、文化的にはツングース系とアジア系が両方混じっているといわれるんですが、渤海が建国することによって分断されます。特に南部の方にいた諸部は、渤海という国を造る主体になっていくわけですが、それができてしまうと、今度はもっと東や北の方にいた諸部が、渤海に阻まれてなかなか中国、唐の国に対して使いを派遣することができない状況になってくる。拂涅（フッデイ）とか虞婁（グロウ）、越喜（エッキ）、それから鉄利（テツリ）といった集団は、これは時々中国と通ずることがある。つまりそういった渤海の圧迫や規制を受けながら、そこからそれを迂回するなり何なりの方法を取って、中国に連絡を取ることができるような集団もいるが、さらに遠方にある郡利（グンリ）とか窟説とか莫曳皆とかといった集団は、自ら使いを派遣することはできないという状態に置かれるんですね。中国東北部の北方で、孤立した状況にあるということになります。これを見ると、号室、莫説、それから莫曳皆などの靺鞨

諸部は、全部とは言いませんが、その一部が考古学で言うところのオホーツク文化との関係が非常にあるように考えていいのではないかと私は思っています。

この問題は大変難しく、もう1つ別に「流鬼」といわれる集団もあります。これは菊池俊彦さんがずっと前から言われていることで、流鬼こそがオホーツク文化人であろうという説です。例えばこの流鬼というのがカムチャツカ半島、カムチャツカの集団、民族ではないかという考え方と、それからサハリンのあたりの人々ではないかと説が分かれているんだけど、カムチャツカ説は成立しないということを言われているのが菊池さんですね。それに対して東洋史の方では、それはカムチャツカでもいいという考え方があるようです。私に成案はまだあるわけではありませんが、今の段階では若月さんのこの比定のとおり、莫説・莫曳皆と呼ばれるような集団が、『日本書紀』等に出てくる「肅慎」を指していると考えても別に間違いはないのではないかと、他に類例のない「流鬼」のみにオホーツク文化人を限定して比定しなくても良いのではないかと考えています。

この「肅慎」というのは、もともと中国の神話にも出てくるような非常に古い言葉なんですね。肅慎の氏という集団として、世界の辺境に住んでいる人々ということで出てくる集団の1つなんですけれども、これをわざわざ『日本書紀』が、この時期にこの言葉を使っていることの意味ということを考える必要がある。この呼称が登場する時期と期間がすごく限定されているということは、やっぱり何か意味があるんじゃないかと思います。

おそらくそれは、この時期に高句麗という朝鮮の北部を支配していた国が滅び、渤海という国ができて、中国東北地方に対する強い支配を確立するということで、隋代までの靺鞨の七部といわれる諸部が再編される。その一部が古称である「肅慎」の名で呼ばれ、日本海の北岸にこの「肅慎」が出没する状況となった。例えば『日本書紀』には6世紀半ばに佐渡島に肅慎人が定期的に現れるところがあったという記事もありますし、それから7世紀の半ばの記事には、弊賂弁島というところに彼らがこもって、大和王権が派遣した人々、あるいはこの地域の蝦夷と対決してたくさん戦死したということが出てくる。特定の時期にそういった記事が集中的に出てくるとしたら、それは単なる観念の問題とかではなくて、中国東北地方や朝鮮半島北部で起こっている大きな政治的変化と連動して、この地域がすごく不安定化するという状況があったんだろうと考える方が自然だと思います。

そのことが、先ほど出てきた蝦夷が非常に活性化する、あるいは蝦夷と対立しているということとも結び付いてくるんじゃないかというのが、私の第1の画期に対する考えになります。ちなみに蝦夷という言葉は、8世紀の初めまで出てきて、その後史料上から姿を消します。この現象は、そういった肅慎というものが出てくるとということと連動して理解すべきだと思います。

さて、次に第2の画期について考えてみたいと思います。レジュメ2pの2に、「民夷両立体制の定着と「夷」の自立」と書きました。第1の時期の後、武廣さんのご説明の中にもあったように、日本列島の東北地方では8世紀の後半からずっと戦争状況が断続的に続きます。各時期について、蝦夷の動向とキーワードをまとめた簡単な表があるので、それをレジュメ4pの右下に載せておきました。それを先にご覧ください。ここまで説明してきた最初の時期というのは、7世紀の末から733年ころまで、つまり出羽柵が秋田に動いていくという時期になりますが、靺鞨との関係が変動して、北方支配体制が機能するという時期。その最後のあたりで「俘囚」

(フシュウ)という新しい言葉が現れる。これは北方変動期と呼ぶべきであろう。その後、戦間期があって、軍事的な緊張が高まったりするということが、おそらく今度は東北地方の太平洋側（陸奥）であったんだろうと思いますけれども、770年ごろから戦争状況がずっと激化していきます。

ちなみに8世紀の後半から9世紀の初めの時期にずっと戦争状況が続いていたということを基にして、通説的な研究では、それを38年戦争期と呼びます。これは38年間ずっと戦争が続いていたということを、この戦争が終わる時期に征討軍を率いていた文室綿麻呂という人が総括している。それで38年戦争期と呼ぶんですが、私は38年間ずっと同じ状況で続いてきたとも考えないですし、時期によって中心になる地域も違えば、戦争の中身も違っていると考えるので、その表に書いてあるような表現を取っています。山海二道の戦争、それから胆沢戦争、奥地紛争ということがずっと続いてきて、870年代の後半に秋田で元慶戦争というのがあって、中世にだんだん向かっていくという変化をたどるということですね。一応それを念頭に置いて続きをお聞きください。

そういう状況で蝦夷たちの境遇にまたちょっと変化が及んできます。それは先ほどの「俘囚」という言葉が出てくることとも密接に関係している。俘囚というのはもともと捕虜という意味ですね。俘も囚も両方ともトリコということです。最初は本当に戦争での捕虜を呼ぶときの言葉として使われていると思います。つまり律令国家と蝦夷とが戦ったということがある場合に、そこで賊側に回っていたその蝦夷が捕まって、俘囚と呼ばれるということになる。最初は捕まって俘囚になった人たちが、先ほどの武蔵さんのご報告にもあったように、非常に遠方にまで移配されるということがある。それはもう明らかに捕虜に対する扱いそのものだと思いますね。

ところがこれがちょっと大きく変化してくるということが研究の中で言われています。戦争の間に捕虜になった人たちが、そのままその地域にとどめ置かれるというふうに変わってくるんですね。それは8世紀の末から9世紀にかけて、律令国家の軍事編成が変わってくるということとの関係があるということを、例えば鈴木拓也さんなどが言っているわけですが、このことは、おそらく蝦夷たちの自己認識といいますか、そういうものにも大きい影響を及ぼしているんじゃないかと考えるんですね。

8世紀後半の山海二道戦争とか胆沢戦争というものを経て、9世紀以降は律令国家のこの地域の地方官人として、城柵の防備とか維持というものを自ら行うようなものとして、この俘囚と呼ばれる人々が出てきます。それから夷狄の「夷」だけを書いてイと呼ばれる人々も出てきます。その両方を合わせて「夷俘」と呼んだことがたくさん史料の中に出てくるんですけれども、その夷と呼ばれる蝦夷の中の有力者たちと、それから民と呼ばれるこの地域のおそらく蝦夷出身ではない人々とが雑居するような村では、夷とか俘と呼ばれるもともと蝦夷の有力者の人たちが、公民をも率いるという状況が見られるようになるというのが9世紀の特徴です。

こうした状況がずっと定着して恒常化していくということが、9世紀の前半から起こってくるだろうということを、私は「民夷両立体制」の成立と呼んでいます。律令国家側は蝦夷の力がどんどん増していくということに対して対応しなければいけないので、いくつかの手を打つわけです。例えば民と夷というのをこれまでは分けて支配していたけれども、災害などの折には両者を分けずに賑給（シンゴウ）を行い、いろいろ物を与える。これを民と夷を融和して一体

化する政策と理解するのが通説ですが、私はそれは逆だと思っています。そうじゃなくて、夷の地域支配の権限を認めたということしかこの史料は表していないと考えるんですね。それから夷俘長というのを設定して、その夷俘の中にリーダーをつくって、ほかの蝦夷たちを治めさせるということをやりますが、これは当然、蝦夷側の有力者の力をさらに認めたことになります。

当時既に権門勢家（都の有力貴族や大寺社）と夷俘の有力者との間に個別的な関係が交易を通じてすっかり出来上がりつつある。これを禁制するという勅や太政官符が出されていますが、繰り返されていることを見ても、これはほとんど有効ではなく、結局この地域で長期にわたる断続的な戦争状態を経た夷俘の人々は、どんどん権勢を拡大するという傾向につながっていくんじゃないかと思われる。

彼らの交易相手は誰なのかということですが、まず1つは渡島の蝦夷であろうと思います。渡島の狄とも呼ばれていて、この渡島がおそらく北海道だというのは間違いのないところだろうと思いますけれども、この人々との間で朝貢交易の形が取られます。特に秋田城などが拠点的な交易場となるわけです。そこでもたらされる毛皮というのは大変平安貴族に珍重されていて、中には朝貢の形を取らず、そういう儀礼の場を経ずに勝手に直接的な関係を結んで、それで手に入れる権門もたくさん現れてくるわけですね。

9世紀後半になると、渡島の蝦夷は、なぜか出羽の秋田城の近辺に出没して、「奥地」（ここでは米代川流域か）の俘囚と抗争したり、それから秋田城の周辺に住んでいる「百姓」（一般の公民を指す）と激しい戦闘に及びます。なぜこの時期に2つの地域、秋田と奥地で抗争が続くようになるのかを、当時の国際情勢の新しい動きと対応していると考えた方がいいんじゃないかというのが、私のもう一つの主張なんですね。

こういったことが起こる背景として、渤海が最盛期を迎えてから宮廷内での有力者間の内訌などが続き、国内にいろいろな問題が起こったりして、政治的影響力がだんだんその周辺地域に及ばなくなってくるという状況がある（資料3参照）。黒水部（黒水靺鞨）は一定の独立性を維持したまま9世紀に入っていくんですけども、これがだんだんと活性化していく。さらに9世紀の後半は連年の不作状況が続き、10世紀に入ると白頭山の火山爆発もあるわけですね。こうしたことで地域勢力間のバランスが非常に変動してくるということが、この背景にあったのではないかと。

史料編7をちょっとご覧ください。三善清行の『藤原保則伝』という、この時代の代表的な良吏とされていた藤原保則についての伝記の一節が挙げてあります。これは10世紀の初めのものですけれども、その中に、この時期権門勢家と夷俘の「酋豪」（有力者）との間で非常に活発な交易が行われていたということが出てくるんですね。これはこの時期の国際的な背景との関係で考えるよりは、むしろ蝦夷、夷俘といわれる人たちの権限が何によって高まっていったかということをよく表している史料です。

出羽国というこの国は、民夷が雑居していて大変豊かで大変珍しい宝がたくさんある。権門で、よき馬、よき鷹（鷹狩りに使う青鷹）を求めている者が、クモのようにたくさん集まってくる。それで醇朴な住民がだまされているというのが、ここで主張されていることなんですけれども、重要なのは、この辺境地域にそういった貴重品がどんどん北から入ってきているということです。馬、鷹、それから金、クロテンの毛皮とかいったものがたくさん王臣諸家から求められて

この地域に集まってくるという、地域経済の構造がもう出来上がっているわけです。

その出羽側での中心は秋田城であったと考えられるので、夷俘の間では、特に秋田城の周辺にいる人々と、それからもっと北の方に住んでいる人々と、それから渡島の蝦夷など北海道などに住んでいるような人々との間で、より自立性の高い奥地の市場とか交易圏というものを形成するということが希求されるということが、この時期起こっていたんじゃないだろうかということを、ちょっと想定してみたいと思います。律令国家の朝貢制支配の拠点になっているのは秋田城ですけれども、ここでは品目や点数などに規制がかけられているし、朝貢という形を取らなきゃいけない。それは非常に不便でもありますし、地域住民の間でもっと自由度があるような市場というものを作りたいと考えられていたとしても、別におかしくはないと思うんですね。

要するにそれは律令国家の支配からもっと距離を置き、自立するという方向にいくわけです。北を向いていくということですが、夷俘はそういったことを一方で考えながら、もう一方では地元出羽国の国司にたくさん賄をして、調などの税の虚納を恒常化していく。それに対して国司側もやっぱりいい顔をしたいので、有力な夷俘などに対して中央の許可を待たずに位階や官職の授与をしたりするということが起こっている。夷俘権力は、律令国家との関係を一応維持しつつ北を向いているという、非常に複雑な利害関係の中に位置付けられるということがずっと続いていました。それが爆発するのがおそらく878年の元慶戦争ではないかと思われるんですね。

熊田亮介さんとか、そのほかの人々が何度もこの事件については書かれています。私がこれについて考えたのはずいぶん以前のことで、一端は公表していますが、今でも別に考えを変える必要はないと思っています。

重要なのはこの事件が突然起こるということです。3月15日、秋田城が夷俘の大群によって攻撃されるということが突然始まるんですね。それからものすごい勢いで夷俘の大群が集まってきた秋田城を焼いて、それから城の周辺の家々も全部焼いてしまうんですね。とても抑えきれなくて秋田城の城主は秋田河の南岸まで撤退します。秋田城から離れて川の南側に野営地を造って、そこで対峙するということになるわけですね。当初の主導権は一貫して夷俘側にあったと思われます。そして「秋田河以北を己が地となさん」という要求を示す。これは考えてみればとんでもないことで、秋田河というのは雄物川ですから、雄物川よりも北は我々の土地であると宣言してしまいます。ところがそれを、律令国家側は受け入れずに反撃し、最終的にはこの戦争にかかわっていた15の村の中で、南側と北側と、それから寝返った村々と3つに分かれるんですね。ばらばらになる。どういう地域集団が絡んでいたかということについて、7枚目の左側のところに元慶戦争時の「賊村」分布図が載せてあるのでご覧下さい(図3)。

秋田城の近隣の「近城反虜」と呼ばれている人々、それから「奥賊」(津軽の人々とかではなく米代川流域の人々)、こういった人々が分断されていく。最後まで様子を窺っているのは津軽俘囚と渡島狄なんですけども、この人々も征討軍側に加担するという決定をかなり最後の段階でします。それで終息するということになる。

だからこの地域にはもしかすると、その秋田城という交易拠点に代わる別の拠点をつくる、あるいは夷俘らが自ら秋田城を支配するという方法を取り得たかもしれない可能性が、9世紀の

末頃にはあったんですね。しかしそうはならなかった。ただ律令国家側も、これを8世紀末のように大軍で押しつぶしてしまうというような戦い方もはや無理になっていたのも、最終的には夷俘の酋豪の在地支配を黙認せざるをえない。元慶の戦争というのは、実質的休戦という結果に至るんですね。

つまりレジュメの2をまとめると、北方でそういった新しい動きがだんだん起こりつつある時期に、渡島と津軽、奥地の人々、それから秋田城の周辺の地域の人々で、それぞれ別個に古代国家との関係が再編されていくということになります。その中には明らかに、もう律令国家とは結び付かなくてもやっていけるという判断をするような集団が、だんだん生まれてきていたというのが10世紀の初めごろまでの時期だったと考えていいのではないかと思います。

もう規定の時間が来てしまったので、その後どうなるのかということについて、本当にざっと見通しだけ述べて終わりにさせていただきます。

レジュメ3pの3、これは本当に専門外で、どこまでそれが言えるか分からない点も多いのですが、10世紀後半以降、中世の蝦夷(エゾ)の原型ができてくる時期といわれるような時期に、東北アジアの情勢はどうなっていたのか、それと国内の状況がどう対応してくるのかということなんですね。

この問題を考えるとき、注目すべき集団というのが1つあると思います。東洋史の日野開三郎さんは、渤海の滅亡後、その跡に「後渤海」といわれる国が一時期100年近くの間、ある程度この地域を治めることができていたといわれています。その中心になった勢力が「兀惹」(ウジャ)といわれる集団ですね(史料編9参照)。初見史料は975年になるんですけども、以後清朝まで表現を変えながらこれがずっと続いていたといわれています。この兀惹については日野さんの研究が、おそらく今なお有効だろうと私は思っています。もともと黒竜江の下流域に住んでいた靺鞨の部族なんですけども、9世紀後半ぐらいから10世紀前半にかけて、そのグループが西南方面へ移動していくと考えるんですね。

なぜそう考えられるかという、6p右側の図2をちょっとご覧ください。これはまだ現段階の作業の結果を図にただけなんですけども、兀惹の比定地というのは論者によってずいぶん分かれるんですね。丸とか四角とかというのは、日野さん、池内宏さん、和田清さん、小川裕人さんの説を基にして書き分けてあります。

よく分かるのは、兀惹と呼ばれている集団がずいぶん広い範囲に分布しているということですね。時期によっても違いますし、どうも非常に広い範囲を移動したということを想定できるんじゃないかということを日野さんが言われています。例えば黒竜江の一番最下流域に近いところから、そこをずっとさかのぼって行って、混同江等との分岐点にも兀惹がありますし、ハバロフスクのあたりにありますし、それからもっとずっと南の方に行くと、牡丹江の上流域あたりにもあるし、そしてさらに後渤海の中心地にも兀惹部がある。これはもう渤海の東京城のあったところになります。そうすると、この兀惹といわれる集団は、黒竜江の下流から上流にずっとさかのぼって行って、最終的には渤海の故地に入り込み、そこでかなり大きい地域権力を持つという時期があったと考えることができるというのが、日野さんの理解になるわけです。

これが同じ時期の日本列島の状況とどう関係するのかということを考えてい。これは本当に見通しだけなので、あまり細かいことはもう言いませんけれども、2pの右側の方をご覧ください

い。私は、こういう大きな動きを9世紀の後半から末、10世紀の前半にかけてみせる兀惹とは、住域から見てもともといわゆる窟説部靺鞨といわれていた集団の後裔に当たるものであって、この人々が活性化して兀惹（兀惹部）というものに名前が変わっていくのではないか、これが渡島の蝦夷などと交易で結びついてたと想定できないだろうかとの仮説を立てているわけです。おそらく兀惹の一部は日本海の沿岸域を南下していくことがあったと思うんですけども、従来からの莫曳皆、莫説といった集団を介して交易するルートもあるでしょうし、それから直接日本海を横断して対岸に至るルートというのも考えることができます。このあたりは考古学の成果を参考にしたいと思うんですが、渡島や津軽蝦夷などとの間で交易を行うということがあった。そうでなければ中国大陆や朝鮮で産出するような産物は入ってこないと思うんです。例えば北方系の馬とか青鷹といったものは、やっぱり中国東北地方から入ってくる部分が多いので、そういった製品の供給源が、この兀惹と呼ばれる集団ではなかったか。それが古来からの関係で、サハリンとか北海道北西海岸域のあたりに位置している「肅慎」（莫説・莫曳皆靺鞨）の手に渡り、渡島の蝦夷を介して秋田城とか、その周辺の交易の拠点のところで交換される。陸奥・出羽の夷俘たちはこうして入手した北方・西方の貴重な産物を、律令国家の平安貴族に売る。そういう交易ルートを想定することができれば、平安中期以降、渡島や津軽、あるいは陸奥、出羽の夷俘たちはそれにより経済的に大きな力を持っていったとので、この中継貿易は、おそらく中国大陆の交易相手側にもそれなりに富をもたらしたんじゃないかというのが私の想像です。ただ、何を中国に持っていったのか。その交易が行われていて大陸の文物が入ってくるということは、やっぱり貿易の対価があるはずで、日本列島の産物が何か向こうにいつているはずなんですけども、それが何なのか分からないというのが、目下悩んでいるところです。

いずれにせよそういう新しい事態があって、北方地域において、また新しい自他認識というものが生まれてくるだろうと考えます。1つは、夷俘、俘囚という言葉がこの地域に住んでいる人々にとって、特別な地域支配の核となるステータスとして機能していく。もう一つは渡島の蝦夷のように、北の方をもっぱら向いていく集団ができてくるということですね。これはある意味では律令国家時代以降ずっとあった、日本国との間の意識というものを、だんだん払拭していくということにつながってくるのかもしれませんが。そのあたりはもう少しいろいろ情報を集めて考えてみたいと思います。

レジュメの「おわりに」のところに2点書いてあります。1つは、やはり古代の蝦夷社会の変動と同時期の東北アジア情勢とは非常に密接な関係があったということ。それからもう1つは、蝦夷の歴史の独自性ということを考えてときに、やはり圧倒的な「民族」集団というのが周辺にあって、その中で流動的な情勢に即応して、各集団が国家を形成することなく、個々に交通環境を構成していくということがずっと続いていた。ある時期においては、国家的なまとまりをつくり得るような時代状況もあったけれども、それは結局実現はしない。そういったことを考えるときに、蝦夷社会においても地域の政治権力が形成されるという視点を持ち込んで、それが東北アジア情勢とどう連動したかという視点で考えていかなければいけないと思います。

古代の毛人・蝦夷（エミシ）から夷俘へ、それから中世の蝦夷（エゾ）といったものに転化していく背景には、常にこうした東北アジアの変動がある。そのことは当然、この地域に住ん

でいる人々の自他認識というものを大きく変容させるということにもつながっていったというのが私の見通しになります。

だいぶ長くなってしまいましたが、これで終わります。ありがとうございました。

引用文献

- 天野哲也「極東民族史におけるオホーツク文化の位置」下（『考古学研究』25-1、1978年）
- 池内宏「鉄利考」「附説 麗初の偽鉄利」（初出1916年。『満鮮史研究』中世第1冊、岡書院、1993年）
- 池内宏「蒲盧毛朶部について」（初出1921年。『満鮮史研究』中世第2冊、座右宝刊行会、1937年）
- 石上英一「古代東アジア地域と日本」（『日本の社会史』1、1987年）
- 小川裕人「三十部女真に就いて」（『東洋学報』24-4、1937年）
- 菊池俊彦「環オホーツク海とオホーツク文化人」（同『環オホーツク海古代文化の研究』、北海道大学図書刊行会、2004年）
- 小嶋芳孝「環日本海交流史の様相」（前川要編『北東アジア交流史研究—古代と中世—』、塙書房、2007年）
- 酒寄雅志「渤海国家の史的展開と国際関係」（『朝鮮史研究会論文集』16、1979年）
- 瀬川拓郎「擦文文化における交易と周辺文化との関係」（同『アイヌ・エコシステムの考古学—異文化交流と自然利用からみたアイヌ社会成立史—』、北海道出版企画センター、2005年）
- 武廣亮平「北方地域との交流とその展開」（熊田亮介・八木光則編『九世紀の蝦夷社会』、高志書院、2007年）
- 田中聡「民夷を論ぜず—九世紀の蝦夷認識」（『立命館史学』18、1997年）
- 田中聡「夷人論—律令国家形成期の自他認識—」（『日本史研究』475、2002年）
- 田中聡「葦島報告批判」（『歴史学研究』874、2010年）
- 津田左右吉「達盧古考」（初出1916年。同全集12巻、1964年）
- 中村英重「渡嶋蝦夷の朝貢と交易」（『古代の東北—歴史と民俗—』、1989年）
- 日野開三郎「兀惹部の発展」（初出1943-45年。『日野開三郎東洋史学論集』16巻、1990年所収）
- 日野開三郎「宋初女真の山東来航の大勢とその由来」（1964年。同上）
- 松井等「満州に於ける遼の疆域」（『満州歴史地理』2、1940年）
- 丸亀金作「高麗と契丹・女真との貿易関係」（『歴史学研究』5-2、1935年）
- 三上次男「高麗顕宗朝における高麗・女真間の交易」（同『金史研究』三、中央公論美術出版、1973年）
- 三上次男「新羅北東境外における黒水・鉄勒・達姑等の諸民族について」（1939年）・同「渤海国の滅亡事情に関する一考察」（1951年）、同『高句麗と渤海』所収。
- 葦島栄紀「北方社会の史的展開と王権・国家」（『歴史学研究』872、2010年）
- 森安孝夫「渤海から契丹へ—征服王朝の成立—」（『東アジア世界における日本古代史講座』7、学生社、1982年）
- 若月義小「古代北方史研究の課題」（『新しい歴史学のために』188、1987年）
- 若月義小「北東アジア国際関係史における列島北部地域の実像—七・八世紀を中心に—」（『京都経済短期大学論集』三巻二号、1996年）

若月義小「肅慎・挹婁・勿吉・靺鞨関連地図解説」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第84集、2000年)
和田清「支那の記載に現はれたる黒龍江下流域の原住民」(初出1939年。同『東亜史論叢』、生活社、
1942年)(『東亜史研究満州篇』、1955年所蔵)

和田清「渤海国地理考」(『東洋学報』36-4、1954年)(『東亜史研究満州篇』、1955年所蔵)

和田清「唐代の東北アジア諸国」(『東方学』8、1954年)(『東亜史研究満州篇』、1955年所蔵)

参考文献

菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』(北海道大学図書刊行会、1995年)

熊谷公男『日本史リブレット11 蝦夷の地と古代国家』(山川出版社、2004年)

熊田亮介『古代国家と東北』(吉川弘文館、2003年)

鈴木拓也『戦争の日本史3 蝦夷と東北戦争』(吉川弘文館、2008年)

仁藤敦史編『古代における北方交流史の研究』(国立歴史民俗博物館研究報告第84集、2000年)

史料編

1 【夷獠と夷人】

①『令集解』賦役令10 辺遠国条

凡辺遠国。有夷人雜類：

謂。夷者夷狄也。雜類者。亦夷之種類也。

釈云。夷。東夷也。挙夷而示余。推可知。雜類。謂夷人之雜類耳。

古記云。夷人雜類謂毛人。肥人。阿麻弥人等類。問。夷人雜類一歟。二歟。

答。本一末二。仮令。隼人。毛人。本土謂之夷人也。此等雜居華夏謂之雜類也。

一云。一種無別。

…之所。応輪調役者。隨事斟量。不必同華夏。

謂。中国也。

釈云。苞氏論語注云。諸夏中国。案对夷之辞。夏音胡雅反。

古記云。問。化外人投化復十年。復訖之後。課役同雜類以不。答。不同也。華夏百姓一種也。

朱云。有夷人雜類条。会下復除条。所読。未知其意何。若没落外蕃条歟。何者令釈云故何。

穴云。所謂即夷人等応輪也。余放。令釈。

②唐賦役令12 辺遠州条 (『通典』卷6・食貨6・賦税下)

諸辺遠州、有夷獠雜類之所。応輪課役者。隨事斟量。不必同華夏。

2 【毛人の倭語化】

『敏達紀』一〇年(五八二)春閏二月

蝦夷数千、寇於辺境。由是、召其魁帥綾糟等。〈魁帥者、大毛人也。〉(後略)

3 【六五八年の遣唐使関連史料】

①『通典』卷一八五 辺亡一 蝦夷

蝦夷国、海島中小国也。其使鬚長四尺、尤善弓矢。挿箭於首、令人載瓢而立、四十步射之、無不中者。大唐顯慶四年(659)十月、隨倭国使入朝。

②『日本書紀』齐明五年(659)秋七月戊寅3

遣小錦下坂合部連石布、大仙下津守連吉祥、使於唐国。仍以道輿蝦夷男女二人、示唐天子。〈伊吉連博德書曰、(中略)卅日、天子相見問訊之、(中略)天子問曰、此等蝦夷国有何方。使人謹答、国有東北。天子問曰、蝦夷幾種。使人謹答、類有三種。遠者名都加留、次者名龜蝦夷、近者熟蝦夷。今此熟蝦夷。毎歳、入貢本国之朝。天子問曰、其国有五穀。使人謹答、無之、食肉存活。天子問曰、国有屋舍。使人謹答、無之。深山之中、止住樹本。天子重曰、朕見蝦夷身面之異、極理喜怪。〉(後略)〈難波吉士男人書曰、(中略)副使親覲天子、奉示蝦夷。於是、蝦夷、以白鹿皮一・弓三・箭八十、献于天子。〉

③『册府元龜』卷九七〇 外臣部 朝貢三 唐顯慶四年十月条

蝦夷国隨倭国使入朝。

④『新唐書』卷二二〇 東夷伝 日本国 〈蝦蟇人と毛人を区別〉

永徽初、其王孝德即位、(中略)孝德死、其子天豐財立。死、子天智立。明年、使者与蝦蟇人偕朝。蝦蟇亦居海島中。其使鬚長四尺許、珥箭於首、令人載瓢而立數十步、射無不中。(中略)後稍習夏音、惡倭名、更号日本。(中略)又妄夸其国都方数千里。南西尽海。東北限大山。其外即毛人云。

4 【蝦夷の冊造・冊養蝦夷・建郡(立評)】

① 『日本書紀』斉明四年(六五八)秋七月甲申条

蝦夷二百余。詣闕朝獻。饗賜贍給。有加於常。仍授冊養蝦夷二人位一階。淳代郡大領沙尼具那小乙下、(或所、云授位二階、使檢戸口。)少領宇婆左健武。勇健者二人位一階。別賜沙尼具那等、綃旗廿頭・鼓二面・弓矢二具・鎧二領。津輕郡大領馬武大乙上。少領青蒜小乙下。勇健者二人位一階。別賜馬武等、綃旗廿頭・鼓二面・弓矢二具・鎧二領。都岐沙羅冊造(闕名)位二階。判官位一階。授淳足冊造大伴君稻積小乙下。又詔淳代郡大領沙奈具那、檢覈蝦夷戸口、与虜戸口。

② 『日本書紀』天武十一年(六八二)夏四月甲申条

越蝦夷伊高岐那等、請俘人七十戸為一郡。乃聽之。

③ 『統日本紀』靈龜元年(七一五)冬十月丁丑条

陸奥蝦夷第三等邑良志別君宇蘇弥奈等言、親族死亡、子孫数人、常恐被狄徒抄略乎。請、於香河村、造建郡家、為編戸民、永保安堵。又蝦夷・須賀君古麻比留等言、先祖以来、貢獻昆布。常採此地、年時不闕。今国府郭下、相去道遠、往還累旬、甚辛苦多。請、於閑村、便建郡家、同於百姓、共率親族、永不闕貢。並許之。

5 【日本史料の肅慎・蝦狄】

① 『日本書紀』欽明五年(五四四)十二月

越国言、於佐渡嶋北御名部之橋岸、有肅慎人、乘一船舶而淹留。春夏捕魚充食。(中略)肅慎人移就瀬波河浦。浦神嚴忌。人不敢近。渴飲其水、死者且半。骨積於巖岬。俗呼肅慎隈。

② 『統日本紀』天平十八年(七四六)是年条

渤海人及鉄利惣一千一百余人、慕化来朝。安置出羽国、給衣糧放還。

③ 『日本書紀』持統十年(六九六)三月甲寅条

賜越度嶋蝦夷伊奈理武志、與肅慎志良須叡草、錦袍袴・緋紺絶・斧等。

④ 『統日本紀』文武三年(六九九)夏四月己酉条

越後蝦狄(兼本「蝦夷」)一百六人賜爵有差。

⑤ 『統日本紀』和銅五年(七一二)九月己丑条

太政官議奏曰、建国辟疆、武功貴所。設官撫民、文教所崇。其北道蝦狄、遠憑阻險、夷縱狂心、屢驚边境。自官軍雷擊、凶賊霧消、狄部晏然、皇民无擾。誠望、便乘時機、遂置一國、式樹司宰、永鎮百姓。奏可之。於是、始置出羽国。

6 【靺鞨諸部・肅慎・蝦夷】

① 『隋書』卷八一・東夷伝靺鞨

靺鞨、在高麗之北、邑落俱有酋長、不相總一。凡有七種、其一号粟末部、與高麗相接、勝兵数千、多驍武、每寇高麗中。其二曰伯咄部、在粟末之北、勝兵七千。其三曰安車骨部、在伯咄東北。其四曰松涅部、在伯咄東。其五曰号室部、在松涅東。其六曰黑水部、在安車骨部西北。其七曰白山部、在粟末東南。勝兵並不過三千、而黑水部尤為勁健。自松涅以東、矢皆石鏃、即古之肅慎氏也。(後略)

② 『新唐書』卷二一九 黑水靺鞨

黑水靺鞨居肅慎地、亦曰挹婁、元魏時曰勿吉、直京師東北六千里、東瀕海、西屬突厥、南高麗、北室韋。離為數十郡、曾各自治。其著者曰粟末部、居最南、抵太白山、亦曰徒太山、與高麗接、依粟末水以居、水源於山西、北注它瀾河、稍東北曰伯咄部、又次安居骨部、益東曰松涅部、居骨之西北曰黑水部、粟末之東曰白山部。部間遠者三四百里、近二百里。(中略)初、黑水西北又有思慕部、益北行十日得郡利部、東北行宿說部、亦屈設、稍東南行十日得莫曳皆部、又有松涅、虞婁、越喜、鉄利等部。其地南距渤海、北、東際於海、西抵室韋、南北袤二千里、東西千里。松涅、鉄利、虞婁、越喜時時通中国、而郡利、屈設、莫曳皆不能自通。今存其朝京師者附左方。(後略)

③ 『通典』卷二百 边防十六 流鬼

流鬼在北海之北、北至夜叉国、余三面皆抵大海、南去莫設靺鞨船行十五日。(中略)靺鞨有乘海至其国貿易、陳国家之盛業、於是其君長孟謹遣其子可也余志、以唐貞觀十四年、三詎而來朝貢。(中略)其長老人伝、言其国北一月行有夜叉人、皆豕牙翹出、瞰人。莫有涉其界、未嘗通聘。

7 【唐俘酋豪と国司の関係】

① 三筆言行錄(藤原保則伝)(延喜七年(907) 一部分)

この国は、民夷雜居して、田地膏腴に、土産の出づるところ、珍貨多端なり。豪吏并せ兼ねること、紀極あることなく、私に租税を増して、恣に徭賦を加へつ。また權門の子の年来蓄き馬良き鷹を求むる者、狠しく聚ること雲のごとし。辺民愚朴にして、告訴するを知らなく、ただその求に随ひて、傾資を言はず。これによりて、隣畝の民、皆貧窮なるがごとし。奸猾の輩、多く富強を致せり。公施すに朝典をもてし、百姓を教へ示して、厳しく憲法を張り、侵犯さしむることなし。もし更に不法なる者あれば、捕へて案じつ。これによりて百姓安堵し、夷の道は清平なり。時に隣國の事、訴訟あれば、皆出羽国に到りて決を取れり。公初め商備にありしとき、専に仁惠をもて化せり。出羽を治むるに及びて、更に威嚴をもて理めつ。吏民に罪あれば、有すところあることなし。論に當る者はその深淺を測ること能はず。

8. 日本三代実録(元慶四年(880) 二月)

一〇十七日辛

丑、内裏犬産之穢、延及所司、仍停國神祭。是日、正五位下守右中弁兼行出羽權守藤原朝臣保則飛驒奏曰、降勝所進掠取甲六十六領、冑卅一枚、大刀四枚、鉞一柄、箭二十隻、蝦夷去年進、契狀曰、所遺甲冑、早速將進、而臨涉年月、未有返上、故遣權大目正六位上秦海連與進、入奥地所勘取也。去年五月、陸奥及常國軍士敗走之日、或有甲冑逃歸本土、或脫系山野、跡身奔竄、是時、前將師從七位上秦忌寸能仁進中冑一百一十、賊徒返進廿二、今與進勘取六十六領、惣一百九十八領、納秋田城、異又夷俘賜饗之日、多以他死亡位記、曰、自稱其姓名、食預賜饗、與進責取死亡位記一百六枚。

9.

《兀惹關係史料》

(1) 『三國史記』11 新羅本紀 憲康王二十二年(886年)

春。北鎮奏。狄國人入鎮、以片木掛樹而帰。遂取以獻。其木書十五字云。「宝露国与黑水国人、共向新羅国和通。」

(2) 『遼史』(元の脱脱撰、1344年)の兀惹

①卷8 景宗世家 保寧七(975)年 (兀惹初見)

九月、敗燕頗於治河、遣其弟安搏追之。燕頗走保兀惹城、安搏乃還、以餘黨千餘戶通州。

②卷13 聖宗世家 統和一〇(992)年

二月乙丑朔、日有食之。韓德威奏李繼遷稱故不出、至靈州俘掠以還。

壬申、兀惹來貢。壬午、免雲州租賦。

庚寅、夏國以韓德威俘掠、遣使來奏、賜詔安慰。辛卯、給復靈州流民。

三月甲辰、鐵驪來貢。

③卷13 聖宗世家 統和二二(994)年

十二月癸巳、女直以宋人浮海賂本國、及兀惹叛來告。

④卷13 聖宗世家 統和二三(995)年

秋七月乙巳朔、女直遣使來貢。

丁巳、兀惹烏昭度、渤海燕頗等侵鐵驪、遣奚王和朔奴等討之。

壬戌、詔爵、朔等州龍衛、恩勝軍更戌。

⑤卷14 聖宗世家 統和二一(1003)年

夏四月乙丑、女直遣使來貢。

戊辰、兀惹、渤海、奧里米、越里篤、越里吉等五部遣使來貢。

⑥卷15 聖宗世家 開泰元(1012)年

八月丙申朔、鐵驪那沙等送兀惹百餘戶至賓州、賜絲絹。

⑦卷16 聖宗世家 太平二(1022)年

五月庚辰、鐵驪遣使獻兀惹十六戶。

⑧卷17 聖宗世家 太平六(1026)年

夏四月戊申、蒲盧毛朵部多兀惹戶、詔索之。

⑨卷36 兵衛志(下)

遼國司紀者五十有九、朝貢無常。有事則遣使徵兵、或下詔專征、不從者討之。助軍衆寡、各從其便、無常額。又有鐵不得國者、興宗重熙十七年(1048)乞以助攻夏國、詔不許。

吐谷渾。鐵驪。鉄轄。兀惹。(以下略)

⑩卷46 臣官志2 北面屬國官

(前略)兀惹部。亦曰烏惹部。

(3) 『宋史』(元、脱脱等、1345年)491、外国列伝7 渤海

太平興國六(981年)、賜烏舍城、浮濱府、渤海琰府王詔曰:

*浮濱=扶余、琰=「玉の光沢あるさま」から竜泉府の飾称か(日野)

(4) 李壽『統質治通鑑長編』(南宋。北宋太祖、欽宗までの九朝の編年史)

宋真宗 平六年(1003年)七月己酉

契丹供奉官李信來歸、信其國中事云。「(中略)其國境、自幽州東行五百五十里、至平州。又五百五十里至遼陽城、即号東京者也。又東北六百里、至烏惹國。其國用漢文法、使印八角而圓之。又東南接高麗。又北至女真、東臨鴨綠江、即新羅也。」

【資料1】「夷狄」研究における基本的問題構成

問題構成1 異民族論

- 1880年代 国境確定→「日本人」定義 ←①人種概念との接合、時間軸上に配列
 1920年代 「帝国」拡張→異種による定義の反転・読みかえ
 ←②文化差の地域差への転化、民族毎に異なる時間
 1930年代 「世界史の発展法則」適用→多元的民族論とのズレ
 ←③民族毎の内発的發展（民族史）
 1950年代 単独講和→独立の拠り所としての民族文化
 ←世界史／民族＝祖国／個人、不可視の「夷狄」

問題構成2 辺境民論

- 1950年代 国民的歴史学運動の失敗／沖縄「復帰」運動、植民地独立
 ←①テクスト内完結 ⇄国家内部の少数者による抵抗
 1960年代 新安保問題 ←②東夷の小帝国・王民共同体・「内なる他者」
 1980年代 国民国家の枠を越えるマイノリティ→エスニシティ論
 ←②法規定の実体化、「疑似民族」論

問題構成3 北方・南方史論

- 1980年代 地方の自立 ←北方考古学・部族同盟論・古琉球論

【資料2】夷人的関係（田中 2002）

こうした夷人観念についての知識が、遅くとも七世紀初頭までには倭国にもたらされていたことは、『隋書』にみる次の二例からも明らかである。

a 倭国、在百濟・新羅東南、水陸二千里、於大海之中依山島而居。魏時、訳通中国。三十余国、皆自稱王。①夷人不知里数、但計以日。（中略）明年（大業四年・六〇八）、上遣文林郎裴清使於倭国。（中略）既至彼都、其王与清相見、大悦曰「我聞海西有大隋、礼儀之國、故遣朝貢。②我夷人、辭在海隅、不聞礼儀、是以稽留境内、不即相見。（後略）」（『隋書』卷八十一・東夷伝倭国条）

b （前略）明年（六〇八）、帝復令寬慰無之、流求不從、寬取其布甲而還。時倭使來朝、見之曰、此夷邪久國人所用也。（後略）（『隋書』卷八十一・東夷伝流求国条）

a には隋からみて東南の僻遠の地にある倭人の未開性を強調した表現①とともに、隋使裴清を迎えた倭王が自ら遜称した表現がみられる②。またbは、倭国の遣隋使が隋朝にて流求の布甲を見せられ、これは倭国からみて南方の「夷人」である「邪久国人」が用いるものだと言したものであり、中国王朝に対して倭王自らが夷人であるという自覚を有するが、周辺の異種集団に対してはこれを夷人とみなす他者観をもつという、七世紀初頭の倭国における二重性を帯びた「夷人」観念の存在を知ることができる。ここでの夷は四夷観念に基づく「東夷」とは明らかに異質であり、むしろ南北朝期に用いられた「夷人」の観念と重なる。中国古代における夷観念の形成過程に関する最近の研究を参考にすれば、個別的な関係が成立している他の集団を夷とする観念は、夏商のとき特定の国家を華夏と呼び慣らすような固定的な中華意識が成立するのに先んじて成立した可能性が高い。四夷の空間的配置の観念が成立する以前には、王化の度合いにより各集団を「地域十夷」等と個別に呼び分けていたようである。

ここで賦役令辺遠国条古記が「夷人雜類」の例として列挙した異種集団、毛人・肥人・阿麻弥人・卑人が、居住地に方位を限定することなく一括されており、しかも呼称に「人」字を共有する点を想起したい。肥人と阿麻弥人は本拠地による名付けと思われるが、卑人はおそらく職掌から（後述）、また毛人は中国の古地理書等にあらわれる伝説的な異種名に因んだ名であろう。このように集団形成の契機も居住地も異なる個別的な集団が、倭国家・王権との間に「○○異種・職掌・地名等十人」という呼称のもと、流動的な交通関係を形成する。こうした集団関係を本稿では「夷人」的関係と呼ぶ。律令国家形成期、さまざまなレベルで数多く展開していたと思われるこの関係の中には、本節冒頭で挙げた賦役令邊外諸条にみるように、毛人や卑人に対する扱いの適用基礎（前提）として言及される「諸人」や「殊俗人」（公式令邊外殊俗条條記・穴記などの集団も含む）これらの存在形態にも共通点が多かったと推測される。合わせてその形成過程を考えてみた。

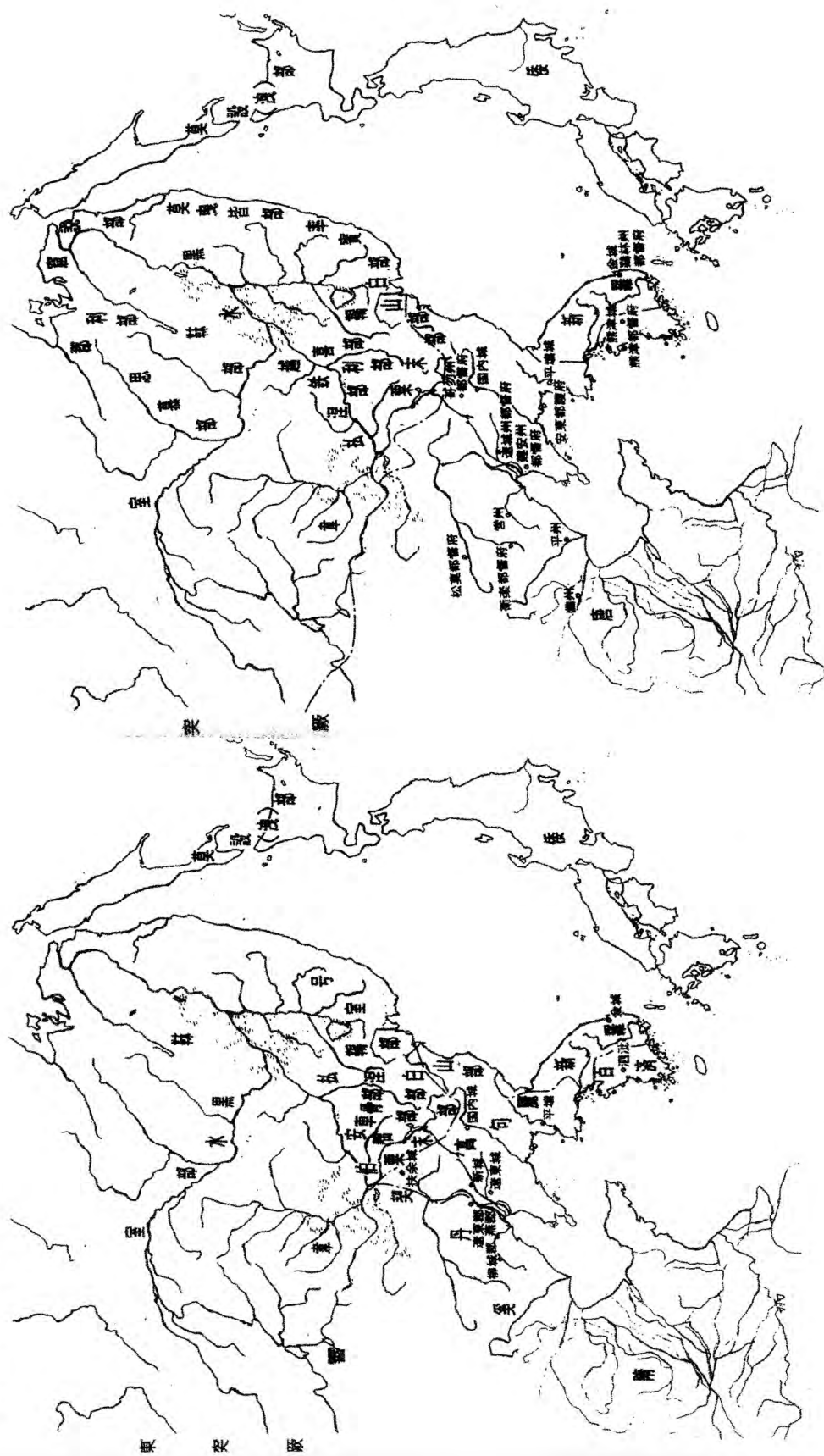
【資料3】

《渤海略年表》

年代	国内情勢	靺鞨等との関係
696年	唐により營州に徙民された高句麗遺民（高句麗人＋粟末靺鞨）が契丹の營州都督への反抗を期に大移動を開始し、唐の攻撃を退ける。營州→遼河→北流松花江中・上流→牡丹江上流→海蘭河に定住。	
698年	靺鞨人大祚榮による振＝震建国。突厥と通好。唐則天期の諸制度を取り入れて中央官制を整備。	699年、遼東に唐の後援を受けて小高句麗国成立。祚榮～武芸期に伯咄・安車骨部滅亡、号室部内附。726～734年、唐一黒水＝新羅との対立激化。
713年	唐より渤海部に封ぜらる。－渤海国の建国	
720年	独自の年号（仁安）を立てる。	
727年	国書に高麗復興を標榜。 （唐冊封下にありながら、突厥のバックアップを得て独立の立場堅持。黒水へは一貫して強行姿勢。日本へは通好し新羅を牽制。同年※1、739年※2）	
740年代	*第二代大武芸の時、突厥瓦解。 北（払捏・鉄利を併呑？）・南（小高句麗を子国化唐に朝貢）・東（日本と和す）・西（契丹と対峙） 律令体制と貢納制の二元支配？ （752年※3、758年※4、759年※5、762年※6）	南北に版図拡大 759～762年、新羅征討計画（日本と協力して挾撃）
762年	*第三代大欽茂、郡王から国王に昇格。（新羅王と同格の「檢校太尉」任官により唐と和親）上京竜泉府から東京龍原府へと遷都（785-794年）。 （771年※7、773年※8、776年※9、778年※10、779年※11、鉄利使を同道し席次を争う。786年※12）	
794年	欽茂死（諡号文王）。族弟元義第四代となるも、一年にして国人に殺され、欽茂の孫華・が第五代と（成王）なる。上京竜泉府へ遷都。 →貴族勢力の伸長を示す？ （795年※13、入貢年限裁定を日本に請う→798年※14、重ねて六年一貢を告ぐ。809年※15、高多弘日本に亡命。810年※16、814年※17、817年？※18）	
818年	第九代明忠（簡王）即位後僅か三月で卒し、従父の仁秀が即位（第十代宣王）。 （819年※19、821年※20、823年※21…一紀一貢を告ぐ。825年※22、827年※23異期を貢む）	818年李師道、827年李同捷の乱に乘じ海北諸部（黒水・越喜？）を制圧。
830年	仁秀死。以降の三代で律令諸制度ほぼ確立し「海東の盛国」と呼ばれるに至る。神策軍設置、官品制・服色制。府州（県）制度など。	
9C後半～	貴族間の内訌激化？ （841年※24以降貿易中心へ。848年※25、859年※26、宣明曆をもたらす。861年※27、871年※28）	840年東ウイグル滅亡→混乱。 875-884年黄巢乱勃発→入唐停止 *唐末反乱→武人藩鎮各地に台頭契丹の勢力伸張。 886年宝麟国・黒水国人が新羅北鎮に和を通ず。 907年朱全忠、後梁を建てる。 912年黒水、唐への入貢を再開。 916年耶律阿保機遼を建てる。918-924年遼陽経営へ
897年	（876年※29年紀入貢廃止を請うも許さず。） （882年※30、到着地加賀での私交易禁止）	
911年～	（892年※31、894年※32） 唐朝にて渤海、新羅と席次を争う（『東史綱目』） （908年※33）	
918年	契丹、奚を併呑。→大譚譚契丹に対し危機感を持ち新羅と「結援」（『契丹国志』）。	
924年	高麗建国し、渤海国境の小勢力を傘下に組み込む。 （919年※34、四名が日本へ亡命）	923年後梁亡び後唐建つ。 925年新羅契丹に入貢、926年渤海征討に功あり。
925年12月～翌年1月	正月～926年まで後唐へ5回遣使。 同5月、渤海、契丹遼州刺史を殺しその民を掠す。遼による急襲で渤海滅亡。→阿保機、竜泉府の地に東丹国を置き太子倍をその王とする。 渤海遺民による反乱相次ぐ。契丹・高麗等への来附続く。（929年※35）東丹使来航）	
928年	阿保機死去→倍本国へ帰り、東丹国は遼陽に後退。以後同地に「後渤海」が勢力を張る（～1009年契丹により滅亡）。周辺には定安国・黒水部・女真三十姓部落・五国部・蒲盧毛朵部等が並存しつつ多様な交通を展開。	

※1～35は遣日使来航年を示す。網掛けは上京せず放還の例。

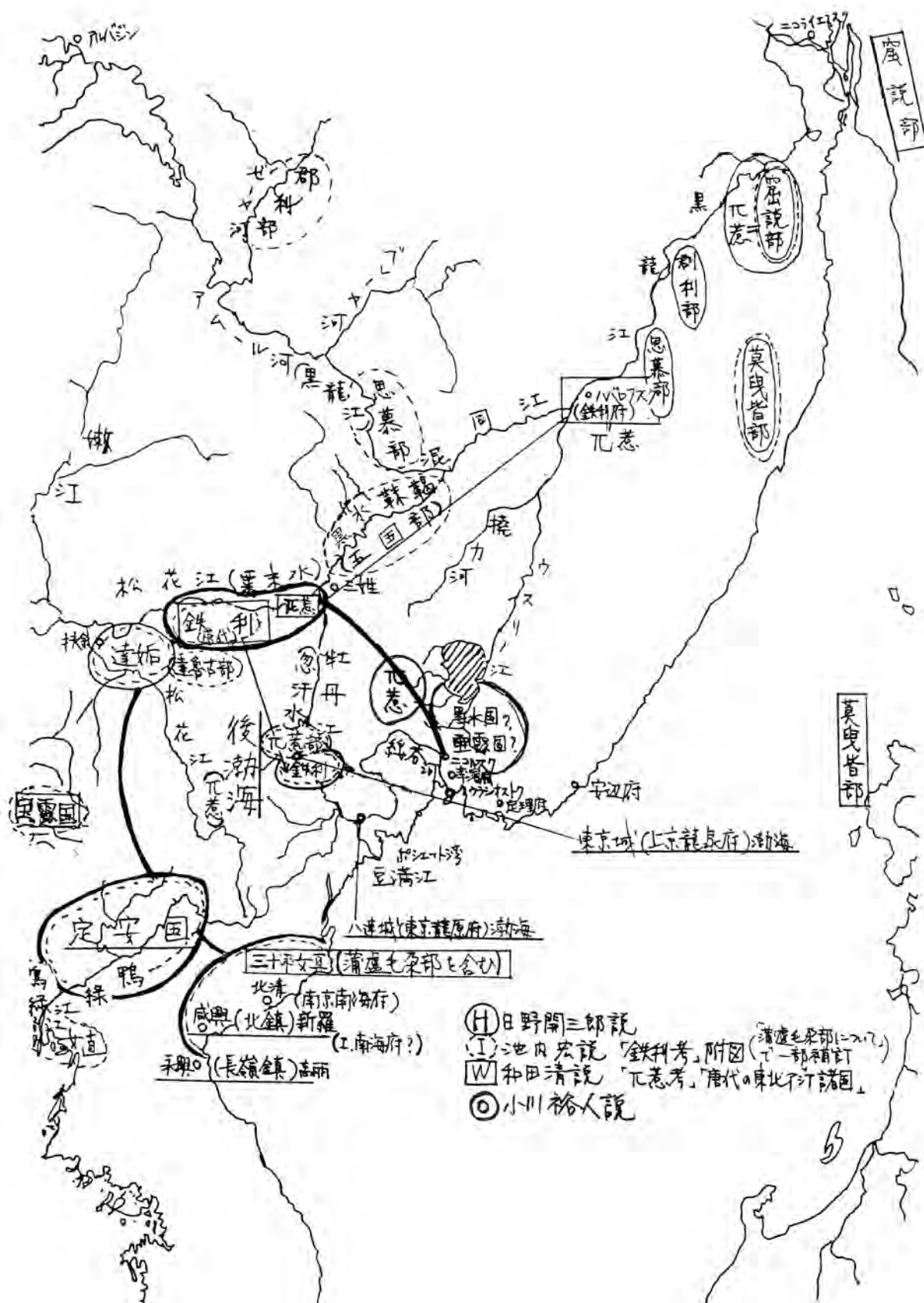
【図1】隋代・唐代の北方世界（若月 2000）



第3図 隋代(581-618年)

第4図 唐代(618-907年) I

【図2】兀惹の比定地



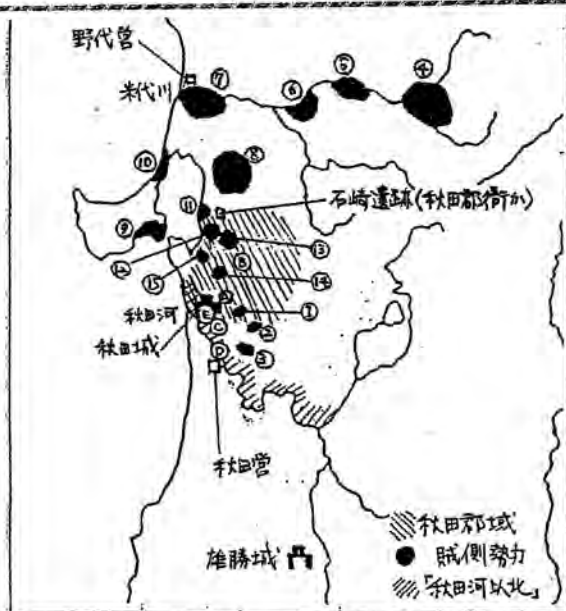
【図3】元慶戦争時の賊村分布図

- 第Ⅰ期（3/15～5/7） 発生～「秋田河（＝雄物川）以北独立」要求提示
 第Ⅱ期（5月半ば～6月下旬）反乱のピーク（5/25～6/3）～3村の裏切り
 第Ⅲ期（6月末～7月半ば） 征討軍側の態勢立て直しと反攻
 第Ⅳ期（7月末～9/25） 「賊村」連合の瓦解（奥賊／近城反虜に分裂）～終結
 第Ⅴ期（10月～881年） 後始末（実質的には一時的休戦状態）

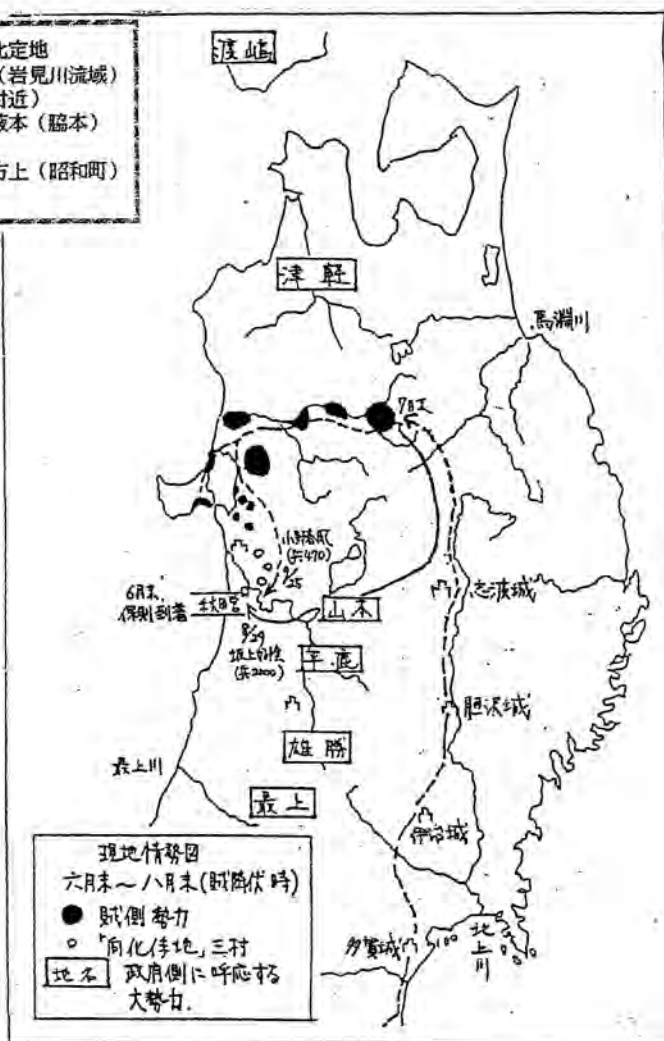
【「賊村」構成模式図】



- 情勢図Ⅰ 乱発生～6月半ば ●…裏俘の「村」比定地
- 【城南の3村】①添河（旭川周辺） ②瀬別（大平川付近） ③助河（岩見川流域）
- 【奥賊7村】④上津野（鹿角） ⑤火内（比内） ⑥塩瀬（鷹巣付近）
⑦野代（能代） ⑧河北（琴丘・森岳方面？） ⑨腋本（脇本）
⑩方口（浜口）
- 【近城反虜5村】⑪大河（大川） ⑫堤・⑬姉刀（井川方面？） ⑭方上（昭和町）
⑮焼岡（新城？）



- ①3/15. 秋田城・郡院 焼亡 3/21. 城内にて戦闘。
 ②3/17. 城北郡南（＝秋田郡城）焼亡。
 ③4/15. 焼山で城側の兵500余殺す。
 ④4/19. 秋田宮入り。4/21. 城側 対策修の結戦。
 5/7. 俘虜五作年余度 戦死→「秋田河以北独立」要求。
 ⑤5/25. 秋田旧城にて 城側500余 裏俘に 四方と包囲する。
 6月「賊勢強盛、日に暴慢を増す。」



- 地理情勢図
 六月末～八月末（戦時局時）
- 賊側勢力
 ○ 「向化俘地」三村
 □ 地名 政府側に呼応する大勢力。